

# Do-Re

北海道立図書館レファレンス通信

No.38(通巻 42号)

平成22年3月24日発行

## 【目次】

- こんなのきましたー参考調査課によせられたレファレンスー 【41】…………… 1  
質問の取り違え
- 市町村のみなさんからの発信 【27】…………… 2  
レファレンスサービスを超えて 石狩市民図書館 渡邊斉志さん
- こんなのありますーいちおしレファレンス・ブッケー 【28】…………… 4  
レファレンスの定番「食べ物・料理」を調べる
- 課員のつぶやきー日々の業務からの短信ー 【25】…………… 5  
道立図書館のシステム更新とレファレンス記録
- レファレンスサービスに関する雑誌記事紹介(2010年1月~2010年3月分)…………… 6
- News…………… 8
  - 1 2010年は「国民読書年」(2010/1)
  - 2 北方資料デジタルライブラリーが国会図書館のPORTAと連携(1/12)
  - 3 道立図書館、「図書館海援隊コーナー」設置(2/16)
  - 4 北海道立図書館書庫ツアー開催(2/18)
  - 5 図書館学習会「図書館の指定管理者制度を考えるーいま何をすべきかー」開催(2/22)
  - 6 市町村図書館職員レファレンス体験研修の実施(2010.2~3)
  - 7 道立図書館資料『知里幸恵ノート』が道有形文化財に指定(3/10)
- 編集後記…………… 10



北海道立図書館

HOKKAIDO PREFECTURAL LIBRARY

## こんなのきました —参考調査課によせられたレファレンス—【41】

### 質問の取り違え

「何を求められているのか」を理解しなければ、もちろん、調査はできません。ところが文書で依頼を受けると、時に、質問の読み取り違いをして、レファレンスを複雑にしてしまうことがあります。不明な点がある場合はもちろん依頼館にインタビューをしますが、その時に調査の方向性を話し合えるよう、多少は調べた上で、電話をしています。

質問や回答の内容に着目した調査事例を取り上げるこの連載、今回は、危機一髪！回答間違いをすところだった事例2件を紹介します。

事項調査申込書の照会事項欄に、手書きで見たことのない大きな一文字が書かれ、その下に「読み、意味を教えてください」と依頼の言葉が添えられています。戸籍で見た字だそうです。文字の形は 左に「口」右に「了」、下に「…」と読めます。それぞれの形から、代表的な漢字の字（辞）典『大漢和辞典』『広漢和辞典』『JIS 漢字字典』『くずし字解説辞典』などを部首引きして、まずは「煦」「照」を候補としてピックアップしました。他の課員と質問の文字に似ていると話していたのですが、でも、やはり違う様に思います。

再度、『大漢和辞典』を引きなおしたところ、「烝」「烝」という字にあたり、やっと、自分の思い違いに気づきました。私は申込書に書かれた字の形を見て、「了」が右半分だと思い調査していたのですが、「了」を中心に、左に「口」右に「く」なのです。この思い込みにより、索引の引き違いをしていました。

間違いに気付いたところで改めて記述を読み直すと、「烝」が候補の字の中で問い合わせの字に最も近いと思われます。『大漢和辞典』の説明には「キョク 亟に同じ。」とあり、ほぼ、この字だと推測しましたが、質問では「く」となっている部首が辞書では「又」になっています。

ここまでの調査で回答しようかと考えていたところ、別の課員が「この字では？」と、『仏教難字大字典』（有賀要延 編 国書刊行会 請求記号：811. 2/B）を片手に参考図書コーナーから戻って来ました。記述を見ると、見出し字「亟」の下の併載文字に、まさに照会事項欄に書かれていた文字が。この字典は一度調べていたのですが、その時は、部首を”火（灬）部”で引いたため、”二部”に掲載されていたこの字に気がつかず見落としていました。

これで自信を持って回答することができました。

「『戦艦大和ノ最期』吉田満／著が現代文で書かれている一般書（大人向け）を探しています。お手数ですがお調べください。」と書かれた申込書が届きました。

この作品は、戦艦大和の沖縄特攻出撃から終焉までを文語体、漢字、カタカナ交じりで記述した体験記です。あまりに特徴ある文体のため、書きなおされたものが存在するのであろうか、疑問を持ちながら調べ始めました。当館所蔵の『戦艦大和ノ最期』（講談社刊）あとがきや『大和の最期、それから 吉田満戦後の航跡』（千早耿一郎 著 講談社 請求記号：910.268/Y）によると、終戦直後に雑誌『創元』に掲載されるはずでしたが、検閲により全面削除となり、著者名を細川宗吉の名で口語体で書き改め出版された異稿があったことがわかりました。探しているはこれだったのかと思い、ここで、依頼館に確認の電話をしたところ、カタカナで書かれていると読みにくいので、ひらがなで書かれているものを探しているとの話、口語体で書かれたもう一つの存在を知りそちらを求めての質問ではありませんでした。角川文庫がカタカナの部分ひらがなで書かれており、当館で所蔵していた資料を貸出して難なくこの件は終了しました。

あの時、間違った回答をしていたらと考えると、背筋が凍る思いです。

## 市町村のみなさんからの発信 【27】

レファレンスサービスを超えて

石狩市民図書館 渡邊 斉志さん

### レファレンスサービス縮小への圧力

レファレンスサービスは、知的な作業を要し、対面で行う人的なサービスであることから、利用者が高い満足度を得られ、また、図書館員も利用者から高い評価を得ることが期待できるものだと言ってよいでしょう。

しかし、レファレンスサービスの原点に立ち返るなら、文献を参照しながら調査するのはそもそも利用者本人であり、図書館員はそれを支援する立場であるということになります。そのため、図書館運営に投入する資源の削減が強く求められる環境下では、レファレンスサービスは、縮小に対する圧力を受けるようになってゆく可能性があります。

昨年秋、大阪府における市場化テストに向けた議論の中で、図書館のレファレンスサービスが「自治体が行なうサービスとしては過剰サービスだ」という主張がなされていたことは記憶に新しいかと思いますが、こうした議論が出てくるのも、レファレンスサービスが、労働集約性が高く高コストであるということばかりでなく、上で述べたような位置付けのものであるということと無関係ではないでしょう。

### レファ協に対する幻想

ところで、行政サービスの場合も、その優先順位に疑問符がつけられた場合、投入資源が削減（その結果としてサービスが縮小・廃止）されることになりませんが、第一義的には、コストをかけずにサービスを維持・充実することが求められます。

レファレンスサービスを取り巻く近年の動きとしてレファレンス協同データベース（レファ協）がありますが、この事業がもたらす大きなメリットは“ナレッジの共有による調査コストの低減化”にありますから、レファ協は、まさに「コストをかけずにサービスの充実を図る」という理念に即した取り組みだと言えるでしょう。

しかし、レファ協そのものには、コスト全体を押し下げる効果は必ずしもあるとは言えませんし（レファ協により効率化が図られるからといって、司書の人数を減らすことにはならないでしょう）、レファ協は図書館員だけでなくユーザも利用できるツールですから、「レファレンスサービスを従来の規模で維持するか否か」という議論に対するインパクトはさほど大きくはないように思われます。

### レファレンスサービス無き図書館？

このように考えると、レファレンスに役立つ資料の収集をはじめとする間接サービスが今後も維持される可能性が高いのに対し、むしろレファレンスサービスの中核と思われるがちな直接サービス（質問回答）の方が消滅する可能性は高いということになります。

図書館関係者の間では、「レファレンスサービスの充実が図書館や図書館員の存在価値を高める」という考え方がそれなりに共有されているようです。また、課題解決型サービスが提唱される中、その重要な構成要素となりうるレファレンスサービスは、まさにこれから発展させるべきものだと考えている図書館員も多いでしょう。

しかし、これらの考え方があながち間違っていないとしても、「図書館の存在価値は認めるが、レファレンスサービス（のうちの直接サービス）は不要」という考え方も十分に成り立ちうるのだ、ということは、図書館業務に携わる者であれば意識しておく必要があるのではないのでしょうか。レファレンスサービス（のうちの直接サービス）が維持される保障がないということは、すなわち、図書館や図書館員がレファレンスサービス抜きで社会から評価を下される日が来るかもしれないことを意味しており、図書館や図書館員というものが持つ社会的な意味までもが変わってゆく可能性があるからです。

#### 知的活動を支援することの射程

おそらく、レファレンスサービス（のうちの直接サービス）が消滅するなどというのは、大半の図書館員にとっては想像できないでしょうし、想像したくもないシナリオでしょう。しかし、客観的に見て上で述べたような状況にあるのだとするならば、レファレンスサービスの重要性を声高に主張するだけでは不十分なことは明らかです。

レファレンスサービスの充実に向けた努力を続ける必要があることはもちろんだとしても、それと並行して、市民の知的活動をどのような方法で活性化することが住民福祉の向上を図る手法としてベストなのかを、図書館単独で行ない得る範囲に限定することなく、他のリソースの活用の可能性も視野に入れつつ構想することもまた、図書館員の役割であるはずで

す。公共図書館の職員は、図書館や図書館員の利害を代弁すべき立場におかれることが多いかもしれませんが、それが本来の姿でないことは言うまでもありません。図書館についての知識・見識を活かしつつ、全体の奉仕者として、「図書館」という視点を超えて、公共サービス全体の将来像を描く作業に取り組めるようになった時、図書館員は、これまでとはまた違った意味で、まちづくりに役立つようになることができるのではないのでしょうか。

#### 【参考】

大阪版市場化テスト・対象業務の官民比較に関する検討のまとめ(提言)  
(PDF ファイルの 12 ページ目以降に「府立図書館管理運営業務」あり)  
<http://www.pref.osaka.jp/gyokaku/sijouka/minkanhikakuteigen.html>

大阪版市場化テスト・対象業務の民間開放について  
<http://www.pref.osaka.jp/gyokaku/sijouka/minkankaiho.html>

図書館を「市場化テスト」の対象事業とすることについて（社団法人日本図書館協会 2009 年 2 月）  
<http://www.jla.or.jp/kenkai/20090216.pdf>

レファレンス協同データベース事業（国立国会図書館 HP）  
<http://www.ndl.go.jp/jp/library/collabo-ref.html>

カレントアウェアネス・ポータル（図書館に関する情報ポータル）  
国立国会図書館関西館 図書館協力課  
<http://current.ndl.go.jp/>

（参考調査課 付記）

## こんなのあります

—いちおしレファレンス・ブッカー 【28】

レファレンスの定番「食べ物・料理」を調べる

Do-Re 通巻 7 号で「豆腐」の語源について書いたことがあります。食べ物や料理についての調査というのはやっぱり定番。今回のお話もカウンターで受けた質問から始まります。

**葛粉の作り方が載っている本はありますか？**

葛粉といえば…くず切り、くず餅など和菓子が思い浮かぶ。それなら料理の本ですぐ見つかるかなと思い、料理の本が置いてある棚（596）に行ってみるが、くず粉を使った調理法については出てくるけど、くず粉自体の作り方は見つからない。では、食品工業（588）かと思い見てみるが、どうも見当たらない。さて、困った…。

このようなときに助けになるのがやっぱり職場の仲間ですね。

「作り方ならこの本に載っているよ」と持って来てくれた本が、

『食品大事典』河野友美編 真珠書院 1970（当館請求記号：R596/Ka）

この事典は、出版年は古いですが、食べ物に関する事典としては詳しくわかりやすいものです。先の質問について調べると、【くずこ】の項に記載があり、作り方のほかにも用途や成分、効果について書かれています。

この事典の特色として挙げられているのが「消費者側から見るという立場から書いた」とのことと、選び方・作り方について重点を置いています。「くず」だけでも、「くずがつお・くずぎり・くずざくら・くずすいせん・くずそうめん・くずたたき・くずちまき・くずに・くずねり・くずまんじゅう・くずもち・くずゆ」と様々な調理法が掲載されています。

きっと他にも掲載されている資料はあるはずと思い、さらに調査を進めると次の2冊が見つかりました。

『日本うまいもの辞典』近藤弘著 東京堂出版 1986（当館請求記号：R596.11/Ni）

この辞典は、先に紹介した『食品大事典』に比べると、読み物性が強い感じですが、紹介されている食材の由来や調理法など詳しく書かれた資料です。また、掲載順は項目の五十音となっていますが、目次は穀類や野菜類、果物类等種類別に書かれています。

質問内容である葛粉について調べると【葛澱粉】の項に記載があります。抽出方法として“水流し法”が紹介されており、その内容は『食品大辞典』と同じものでした。他に葛澱粉の特色やこれを使ったお菓子について書かれていました。

『材料料理大事典』学習研究社 1987 全4巻+索引（当館請求記号：R596/Z/1-4）

先の2冊に比べ、よりビジュアル的な事典になっています。全4巻で第1・2巻が魚介類、第3巻が野菜類、第4巻が肉類・穀類という分類されています。これとは別に索引があり、材料ごと、料理ごとの索引となっています。

質問内容については、4巻「でんぷん・料理補助材料」の項で【くず粉】という項目があります。製法については次項の【さつまいもでんぷん】と同じと書かれており、そちらの項を見ると上記の資料とほぼ同じ工程になっています。調理法自体は上の資料に比べ少ないですが、写真で完成品を見ることができるとは大きいと思います。主な産地のくず粉（筑前くず、吉野くず、大和くず）や「くずそうめん」の写真があり、イメージがしやすいものとなっています。

食材や調理の仕方については昔から伝わっているものが多く、出版年が古い資料でもわかりやすい資料が多くあります。今回紹介した「食品大事典」は40年前の出版で現在入手不可のものですが、同様の質問には重宝します。料理についての質問だと、つい作り方など一般書に行ってしまうのですが、事典類も十分使えるというお話でした。

## 課員のつばやき — 日々の業務からの短信—【25】

### 道立図書館のシステム更新とレファレンス記録

1月に業務システムが新しくなって、もうすぐ3ヶ月、ようやく機器の操作にも慣れてきた頃です。仕事の内容は今までと変わりませんが、参考調査課では劇的な変化がありました。記録の電子化です。当課で行っているレファレンス記録をすべて業務システムの中で入力、管理しています。今までレファレンス記録は一定の書式に従って手書きまたはワープロソフトで書いていましたが、それを業務システムのデータベースの中に入れていきます。3月中旬の段階で380件の記録が登録されています。これに北方資料部で登録しているものを含めると、すでに400件を超えています。

昨今、レファレンスのデータベース化は図書館職員としては気になる事柄です。当課も同じで、いつかはデータベース化を、と考えていました。しかし、全部の照会を記録しているため、その量が足かせとなり、どうすれば効率よくデータベース化できるか、その記録の蓄積を有効活用できるかを模索していました。

大きな問題は全部のレファレンスを電子化して記録するかどうかでした。

簡易なもの、それこそ「北海道新聞はありますか？」のようなものであれば、紙の記録票にさらさらと書いた方が楽なのはわかっています。さりとて記録を精査して改めてデータベースに入力するという二重入力は色々難しいので、簡単なものでもデータベースに入力しようか。しかし、電子化することでかえって手間がかかるのではないかという懸念がありました。

もう1つの側面としては統計についてです。記録を入力することでレファレンスの統計を一緒にとることは出来ないか。これも手書き（ワープロソフト等で作成したものを含む）とデータベースの記録が混在すると混乱するので、出来れば全記録をデータベースに入れて集計してしまいたい。色々な数字を取るため、素人がエクセルやアクセスでデータベースを作ることは不可能でした。過去、パソコンに詳しい職員が試みましたが、挫折しています。

機器更新にあわせて、機械に出来ることはやらせてしまおう、この機会を逃すまいと色々話し合い、全記録を入力する大決断をしました。それを踏まえて入力しやすく、運用や活用しやすいものをと、SEさんと話し合っていました。とはいえ、当課で集計している統計の数字は複雑なので、最終的には従来どおり手での集計となりました。そのため、書式を変えた新しい記録票をプリントアウトしストックするので、完全なペーパーレスにはなりませんでした。

しかし、個人的にはそれでよかったと思います。月ごとのレファレンス記録を回覧して課内で共有したり、事例紹介などに使うレファレンスを記録から探すといったブラウジング的に見る場合、画面で見るのは厳しいと思っていました。やはり今までどおり、紙で読むということも必要でした。そのため、デジタルとアナログ両方のいいところ取りが出来ればと思っていました。

記録をいつシステムに登録するかも意見を出して決めました。受理したらすぐシステムに入力し、調査経過を打ち込みつつ、最後に記録票と回答文章をシステムから出力する方法にしました。これが効を奏して、順調に記録を積み上げています。やはり、データベースにして検索できるのはとても便利です。

まだまだ課題点はありますが、次は蓄積したデータから事例の一般公開やレファレンス協同データベースへの提供など、二次活用についての段階に進むことができます。

さて、当課はレファレンスの記録を業務システムで運用していくことになりましたが、記録のデータベース化は自前のデータベースを使わなくても出来ます。その方法の一つにレファレンス協同データベース（レファ協と略）を使って自館のレファレンスを検索することです。2月17日に行われたレファレンス協同データベース事業フォーラムの実践報告ではとても参考になる発表がされました。中でも1日1件登録すると決め、レファ協の入力の様式に合わせて紙での記録票の様式を変え、それをレファ協に登録するという（秋田県）横手市立平鹿図書館の発表はとても印象深いものでした。

# レファレンス・サービスに関する雑誌記事紹介

(2010年1月～2010年3月分)

※ 論題(記事名)、著者、雑誌名、出版者/編者 巻号、発行年月、掲載ページ の順に記載  
(参考: 国立国会図書館NDL OPAC 雑誌記事索引。本号では一部12月発行の記事も掲載しています)

- 1 高田高史のレファレンスひろば(その14)「紅葉の色付きと気候の関係を知りたい」ほか/高田高史 『あうる』 図書館の学校 92[2009 10/12] p.40～43
- 2 分科会 B「医療・健康情報サービスをめぐる公共図書館との連携」に参加して(JMLA 活動報告 第80回 NPO 法人日本医学図書館協会総会/南方政英 『医学図書館』 日本医学図書館協会 56(4)[2009.12] p.337～339
- 3 名古屋アメリカンセンター・レファレンス資料室の概要と現状(特集 企業の情報部門の現状と展望)/大鍋千香子 『情報の科学と技術』 情報科学技術協会/情報科学技術協会 60(1)[2010.1] p.23～28
- 4 図書館が地域における「知の拠点」として位置づくための司書の役割とは何か(特集 2010年「国民読書年」を迎えて—知的資源としての図書館における司書の役割を考察する)/小田光宏 『社会教育』 全日本社会教育連合会 65(1)[2010.1] p.12～16
- 5 国立国会図書館近代デジタルライブラリーおよび新聞・雑誌に関するデータベース(新年特集 日本史研究とデータベース—利用者の立場から)/真辺将之 『日本歴史』 吉川弘文館 740[2010.1] p.144～146
- 6 Wikipedia を活用した新たな情報ナビゲーションシステムの提案(第36回生物医学図書館員研究会)/清田陽司 『薬学図書館』 日本薬学図書館協議会 55(1)[2010] p.51～59
- 7 れふぁれんす三題断(その166)千葉県立中央図書館の巻 昔のことから今のことまで調べ方で世界が広がる/大石豊 『図書館雑誌』 日本図書館協会 104(1)[2010.1] p.34～35
- 8 クローズアップNDL(第19回)あなたの図書館に伺います!—レファレンス業務に係る派遣研修 /荻原みさ子 『図書館雑誌』 日本図書館協会 104(1)[2010.1] p.36
- 9 高田高史のレファレンスひろば(その15)「とにかく何でもいいから外国の図書館の写真が出ている本を、なるべくたくさん見たいんです」ほか/高田高史 『あうる』 図書館の学校 93[2010.2・3] p.46～49
- 10 チャートで考えるレファレンスツールの活用(ステップ27)世界文学(その2)/大串夏身 『あうる』 図書館の学校 93[2010.2・3] p.50～53
- 11 ビジネスマン利用者の開拓に向けた『営業』活動の日々—神奈川県立川崎図書館の特色あるPR作戦(特集 都道府県立図書館のこれから(2))/佐賀原正江 『図書館雑誌』 日本図書館協会 104(2)[2010.2] p.76～77

- 12 香川県立図書館の課題解決支援サービス―第一歩?は“子育て支援コーナー”(特集 都道府県立図書館のこれから(2))/大林直子 『図書館雑誌』 日本図書館協会 104(2)[2010.2] p.78~79
- 13 れふあれんす三題噺(その 167)国立音楽大学附属図書館の巻 音楽図書館のレファレンス事例 /高田涼子 『図書館雑誌』 日本図書館協会 104(2)[2010.2] p.88~89 注)
- 14 クローズアップNDL(第20回)レファレンス協同データベース―全国の図書館員の叢智の森 /佐藤久美子 『図書館雑誌』 日本図書館協会 104(2)[2010.2] p.96
- 15 はじめて医療情報サービス担当者になった人への入門の入門―肩の力を抜いて図書館と医療情報を考える(特集 図書館イマドキ情報)/石井保志 『みんなの図書館』 教育史料出版会図書館問題研究会 395[2010.3] p.11~16

注 : 『図書館雑誌』の連載記事「れふあれんす三題噺」について、3月発行の104巻3号では非掲載となっています。次回「その168」は4月号に掲載予定。

#### おすすめ情報

日外アソシエーツ社が運営するインターネット・サイト『レファレンスクラブ』はレファレンスの仕事に役立つさまざまな情報が得られるおすすめサイトですが、中でも最新の図書館ニュースが調べられる『図書館関係ニュース』は必見といえましょう。(会員登録すると「ニュース」を含む定期メルマガが送られてくるようになります)

著作権に配慮してリンクのみとなっていますが、ワンクリックで記事本文が呼び出せるので非常に便利です。ぜひお試しください。今回は、図書館関係ニュースのバックナンバーからレファレンスに関係するものをピックアップしてみました。

(期間限定でリンク切れのものも多いので最新版を同サイトでチェックしましょう。)

『レファレンスクラブ』 <http://www.reference-net.jp/index.html>

『図書館関連ニュース』 <http://reference-club.cocolog-nifty.com/blog/>

- Amazon の書籍検索に図書館の蔵書状況を追加表示「Libron」  
[http://www.forest.impress.co.jp/docs/serial/okiniiri/20100106\\_340586.html](http://www.forest.impress.co.jp/docs/serial/okiniiri/20100106_340586.html) (窓の杜 2010.1.6)
- 著作権侵害、対象外に 写真の端に写った絵画など、文化庁方針  
<http://www.nikkei.co.jp/news/shakai/20100119ATDG1802P18012010.html> (日経ネット 2010.1.19)
- 「調べものは県立図書館で」利用者が成果発表【山梨】  
<http://www.sannichi.co.jp/local/news/2010/02/12/11.html> (山梨日日新聞 2010.2.12)
- 職探し、図書館がお助け コーナー設置、司書も積極助言  
<http://www.asahi.com/job/news/OSK201002230206.html> (朝日新聞 2010.2.24)
- グーグル電子書籍、日本でも秋ごろ販売へ  
<http://www.asahi.com/national/update/0224/TKY201002240422.html> (朝日新聞 2010.2.24)
- ビジネスにも使って 県立図書館【大分】  
[http://www.oita-press.co.jp/localNews/2010\\_126716446721.html](http://www.oita-press.co.jp/localNews/2010_126716446721.html) (大分合同新聞 2010.2.26)
- 総務省など電子本普及へルール作り―著作権・流通を研究へ  
<http://www.yomiuri.co.jp/book/news/20100303bk01.htm> (読売新聞 2010.3.3)
- 横浜市中央図書館で専門家による連続講座「暮らしを守る法律」  
<http://www.hamakei.com/headline/4853/> (ヨコハマ経済新聞 2010.3.5)



# NEWS

## 1 2010年は「国民読書年」(2010/1)

「国民読書年に関する決議」が、平成20年(2008年)6月6日に衆参両院全会一致で採択されました。この決議では「文字・活字文化振興法」の制定から5年目にあたる2010年を「国民読書年」と定め、政官民協力のもとで国をあげてあらゆる努力を重ねることを宣言しています。

昨年10月19日にロゴとキャッチフレーズも発表され、キャッチフレーズは「じゃあ、読もう。」となっています。ロゴについては、使用上の注意に従えば誰でも使用することができます。詳しいことについては文字・活字文化推進機構HPをご覧ください。

財団法人文字・活字文化推進機構 <http://www.mojikatsuji.or.jp/2010.html>

## 2 北方資料デジタルライブラリーが国会図書館のPORTAと連携(1/12)

道立図書館の北方資料デジタルライブラリーがPORTA(国立国会図書館デジタルアーカイブポータル)と連携しました。PORTAは、国内各機関が公開するデジタルアーカイブを統合検索するシステムです。(2010年3月8日現在の検索対象は54アーカイブ)

PORTA(国立国会図書館デジタルアーカイブポータルサイト) <http://porta.ndl.go.jp/>

## 3 道立図書館、「図書館海援隊コーナー」設置(2/16)

北海道立図書館では以前から、一般閲覧室内に課題解決に役立つ資料を集めたビジネス支援コーナーを設けていますが、このたび前号のNEWSでも紹介した「図書館海援隊」プロジェクトに参加するにあたって、パンフレットコーナーの新たな設置やビジネスコーナー全般のリニューアルを行いました。

コーナーの様子については、道立図書館HP「図書館海援隊プロジェクトほっかいどう」で見ることができます。

ビジネスコーナー「図書館海援隊」

<http://www.library.pref.hokkaido.jp/web/reference/qlnh00000000zfh.html>

## 4 北海道立図書館書庫ツアー開催(2/18)

2月18日(木)、当館書庫において、今年度4回目の書庫ツアーを開催しました。今回は第1書庫のみを重点的に紹介するツアーで、当館の所蔵資料の中でも特徴的な北方資料、栗田寄贈資料について、より詳しい説明をすることができ、ツアー後の質疑でも様々な質問が寄せられ、好評のうちに終わりました。参考調査課では、これまでの開催方法を踏まえてさらにより良くした形で、来年度も書庫ツアーを開催する予定です。

## 5 図書館学習会「図書館の指定管理者制度を考える-いま何をすべきか-」開催(2/22)

2月22日(月)、札幌市中央区の北海道青年会館において、北海道立図書館指定管理者制度を考えるチーム有志主催による図書館学習会「図書館の指定管理者制度を考える-いま何をすべきか-」が開催されました。

生涯学習、子ども読書活動推進、ビジネス支援と図書館の役割がますます大きくなるなかで、図書館の指定管理者制度導入がよい選択なのか、全国の図書館の指定管理者制度導入の実情や

反対の取組など、日本図書館協会の常世田氏を招いて、これからの取組を考えました。

## 6 市町村図書館職員レファレンス体験研修の実施 (2010. 2~3)

今年2月から3月にかけて、恵庭市・釧路市の2館14名の職員が来館し、レファレンス体験研修を行ないました。

恵庭市の研修者は学校図書館司書ということで、当館のレファレンスブックに数多く触れてもらうことに重点を置いて、少人数のグループ制で演習を行いました。

釧路市の研修者は2名で、2日日程で、当館の使い方、地域資料やツールの利用方法等、図書館司書として知識や技術を時間をかけて伝えることができました。

(2/26・恵庭市12名、3/9-10・釧路市2名)

## 7 道立図書館資料『知里幸恵ノート』が道有形文化財に指定 (3/10)

3月10日(水)、北海道教育委員会は、当館の所蔵する資料『知里幸恵ノート』を道有形文化財に指定することを決定しました。

この資料は、登別市生まれの知里幸恵が、アイヌ民族に伝わるユーカラ等の口承文芸作品をローマ字で記載したもので、これを基に「アイヌ神謡集」が編集されています。

知里幸恵の死後、アイヌ語研究で知られる日本の言語学者、金田一京助氏が所蔵していましたが、昭和50年に道立図書館に寄贈されました。

## 編集後記

- ◇ 食べ物のレファレンスを受けるとなんとなく、それが食べたくなることがありませんか？ 今回の「葛」についても和菓子の本をたくさん見ることになり、しばらく和菓子がマイブームになりました。(on)
  
- ◆ 電子書籍のことが気になり、色々と情報を集めていますと、どんどん進んでいると感じます。ついていけるのか、ちょっと不安です。新しく買った5世代 iPod nano と iTunes8 をいまだに使いこなせておりません(や)。
  
- ◇ 最近の雑誌は付録がとても豪華ですね。付録欲しさに手にとっては思い直して棚に戻す、書店に行くとなんなことを繰り返しています。でも、あの付録、図書館資料としては、ちょっと扱いに困りますよね。(た)
  
- ◆ 早いもので今年度はこれで最後の「Do-Re」となっていました。この冬は図書館の庭にエゾリス等の動物の足跡があるのを意識して見つけていました。また元気な姿を見られるよう期待しています。(T)
  
- ◇ 今号の“市町村のみなさんからの発信”では、石狩市民図書館の渡邊館長さんにショッキングな予言？を寄稿していただきました。ありがとうございました。レファレンスの本質は資源の掘り起こしにあるわけで、資源の蓄積と図書館ネットワークが機能している状況下では、レファレンスに過剰も不足もない気がします。一方でプロセスの合理化と無駄の淘汰は徹底して求められるでしょう。(へ)
  
- ◆ 平成21年度の最終号をお届けします。年度末の慌ただしさの中ではありますが、市町村の皆様のご協力により、充実した誌面をお届けできたことにお礼を申し上げます。今後ともご支援下さい。<S>



### **Do-Re(どうれ)の由縁**

“どうりつとしょかんレファレンス”の  
略から名付けました。  
しかしながら  
“どれどれレファレンス”からとの説もあります。

---

THE REFERENCE NEWSLETTER OF HOKKAIDO PREFECTURAL LIBRARY

## **Do-Re**

**北海道立図書館レファレンス通信 No.38(通巻42号)**

発行年月日 平成22年3月24日  
編集 北海道立図書館参考調査課  
発行 北海道立図書館  
〒069-0834 北海道江別市文京台東町41番地  
TEL 011-386-8521 FAX 011-386-6906  
<http://www.library.pref.hokkaido.jp>  
e-mail: [sancho@library.pref.hokkaido.jp](mailto:sancho@library.pref.hokkaido.jp)

---